

56 「蟲書」についての一考察

戸田 静夫・亀 節子

「蟲書」は、現代でいうところの人体寄生虫学書に相当する記載がなされている。中国では、古来より寄生虫に関する文献が数多く見受けられる。特に「諸病源侯論」(単元集、宋代)巻之十八「九蟲諸病」において、伏虫、白虫、肉虫、肺虫、胃虫、弱虫、赤虫、蟻虫といった九虫、長虫、赤虫、蟻虫といった三虫、寸白虫、蛔虫などの記載がある。そして、これらに対しての治療としては、「古今医統大全」(徐春甫、明代)によると九蟲や五臟長蟲の処方として狼牙散、檳榔散など十数種におよぶ方剤の記載がある。また、蛔虫に対しては貫衆散、狼牙散とその加味方、三蟲に対しては三蟲白欵圓方などが記載されている。

日本では、吉田意休らによる「蟲書」に数多くの記載がなされている。そして、その治療は吉田流の穴名を用

いた鍼術である。特に「鍼口傳書 蟲書」では、寸白蟲、傳尸病蟲、穿心蟲、翻胃蟲、疳蚘蟲、鬼胎蟲、血鱉蟲、肺吞蟲、馬尾蟲、地蟲、五積、氣積などの虫が図解されている。これらの多くは、「諸病源侯論」では記載されていない。このことは、これらの虫の多くが日本独特のものであるか、吉田流の医学者たちが独自で見出したものであるのか様々考えられるが、定かではない。

一方、「古寫本 鍼灸秘書」では、先述の「鍼口傳書 蟲書」とほぼ同様の虫の図解が記載されている。しかし、その虫の図は、「鍼口傳書 蟲書」より簡略である。むしろこれらの多くは「鍼治諸蟲論図」、「諸蟲鍼治療論」と類似している。

「鍼口傳書 蟲書」では、それらに用いる穴名が百守、肝下腕、脾下腕、左枝、右枝、暮乙、催典、中胃、心上腕、肺上腕、肝上腕、肩類、九珍、黄分、臍滑、乳間、筋低、五併、十一夾、十二宴、裕冥、託脱、腸境、門儀、腎上中腕、命門上中腕、九祥、十四隆、腸境、零陰、廣慮、円滑、三訂正、七穩、十八郭、氣律など記載されている。それら穴名のほとんどは、「吉田流鍼穴法、家秘鍼

穴」(吉田意休)に図解されている。これらは、従来の十四経絡上の経穴とはいえない。むしろ、これらは吉田流穴名もしくは阿是穴といつてよいであろう。

その他特筆すべきことは、鍼術に性別、年齢、陰陽虚实を考慮するべきであるとか、刺鍼については補瀉や鍼刺入の浅深を考慮するべきなど細部にわたる注意が記載されている。

しかし、「古寫本 鍼灸秘書」では中かん、たんちゅうなどのような十四経絡上の経穴も記載されている。また、穴名を記載していない蟲病の項がある。そして、記載事項も「鍼口傳書 蟲書」を簡潔にまとめたように読みとれる。

現代西洋医学によつて確立された寄生虫病学と、これらの時代の医学者の寄生虫に対する医学研究を同一視することは出来ない。このような書物が出るということは、吉田流の虫書が書かれた時代は衛生事情が良いとはいえず民衆が様々な寄生虫病をはじめとする微生物病に悩まされていたと思われる。そして、それら多くの病因はいわゆる虫と考えられていたと思われる。

はたして鍼術によつてこれらが改善されたとは思われないが、この時代における最善の治療の一つと考えられたであろう。また、寄生虫病でなくても類似症候に鍼術は有効性を示すことがあつたのであろう。

これらのことは、鍼術史において特筆すべきものである。

(関西鍼灸短期大学)